

清水幾太郎著「倫理学ノート」講談社 学術文庫 2000年7月10日刊を読む

1. 長い時代を通じて、飢餓から解放されていたのは、貴族というグループであった。ヨーロッパ諸国の場合、彼らのうちの優れたものは、この恵まれた生活の中で活力を失うことを恐れ、やがて没落するであろうという不安に苦しんで、飢餓の恐怖のままに労働に堪えている大衆の困苦に対応するものを敢えて自分たちの生活に導入して、自己鍛錬の手段たらしめようと試みた。彼らが導入したのは、冷水浴であり、狐狩であり、正餐のための正装であり、さまざまな儀式やスポーツであった。それを或る人は「人為的な不快」(16)と呼び、他の人は「計画された不快」(148)と呼んだ。それは意志の教育であった。今日、多くの人々が飢餓の恐怖から解放されたというのは、多くの人々が或る程度まで過去の貴族に似た事情にあることを意味する。
2. しかし、彼らはみな平等な人間なのであろうか。同じく地上に生れたという理由だけで、彼らを平等と見るべきであらうか。もとより、或る方面からすれば、彼らは正しく平等であらうし、また、他の方面からすれば、彼らを平等であるかのように取り扱うのが礼儀というものであろう。
3. しかし、道徳の方面から見れば、すなわち、意志による欲望の形成という見地からすれば、残念ながら、彼らを二つのグループに区別しなければならない。もう四十年以上も昔のことになるが、恐らく、私と同じような必要を感じたのであろう、オルテガ・イ・ガセットは、人間を二つのグループに分けて、一を「貴族」と名づけ、他を「大衆」と名づけた。これらの名称は、貧富、職業、学歴などと関係があるものでなく、ただ、前者は、無理と知りつつ、敢えて自分に高い要求を課し、それへ向って生きる少数者であり、後者は、自分に何一つ要求を課することなく、現にある自己のままで生きる多数者である(111)。それが望ましいか否かは別として、現実の社会には、こういう二つのグループがあるようである。
4. 自然的欲望からの自由において、自ら高い規範を打ち樹て、それへ向かって自己を構成して行こうと努力する少数者と、自然的欲望の満足に安心して、トラブルの原因を外部の蔽うもののうちのみに求め、自己の構成に堪え得ない多数者。飢餓の恐怖から解放された時代の道徳は、すべての「大衆」に「貴族」たることを要求するところから始まるであらう。しかし、それが不可能であるならば、「大衆」に向って「貴族」への服従を要求するところから始まるであらう。

P436 ~ 437

[コメント]

「貴族」とは「無理と知りつつ、敢えて自分に高い要求を課し、それへ向って生きる少数者」。「大衆」とは「自分に何一つ要求を課することなく現にある自己のままで生きる多数者」。どちらの生き方を選ぶか。倫理学は現代に課題を投げ続ける。

- 2009年8月10日林明夫記 -